

福島処理水の海洋放出について思うこと-議論できるデータの公開を-

政府は 8/24 日から福島原発の処理水の海洋放出を実施した。これに対しては反対や賛成の意見がある。感情論、風評被害の可能性はさておき、私は議論するにはきちんとした科学的データをもとにすべきであると思う。

日本政府は、処理水のトリチウム濃度が、中国における通常稼働している原発からで放出されているトリチウム濃度の半分以下と主張する。しかし、ALPS 処理された福島の汚染水のトリチウム濃度と、中国での事故を起こしていない原発からでるトリチウム濃度を比較することはできない。なぜなら、前者は炉心融解により核燃料デブリと直接接する水を ALPS 処理されたものであり、後者は核燃料に触れることのない通常原発冷却水の内容なのである。

約 40 年前に原子力発電所が建設されてからつい最近まで、この冷却水には放射性物質は含まれないと説明されてきた。しかし、このトリチウム問題から、私は、正常な稼働時にもトリチウムが発生しており基準に基づいた濃度に希釈して大気や海洋に放出している事実を初めて知った。

この冷却水は放射性物質であるトリチウムが含まれているので、海外によっては汚染水とよばれているようである。処理水と汚染水を間違えて発言した農水大臣は強く非難されたが、この ALPS 処理水の中にはトリチウムが含まれるので、それ以外の核種の有無に関わらず汚染水とも定義できる。

正常に稼働している原発からの放射性物質の漏出はトリチウムのみである。海洋放出に反対の人たちは、ALPS 処理ではトリチウム以外の取り除かれていない核種があると主張する。

海洋放出に反対・賛成の議論は、放出される水にどれくらいの放射性物質が含まれているかという議論に置き換えることができる。そのためには、責任ある立場の人が、ALPS 処理水には放射能をだす核種が残っていないかどうかの、どれくらい残っているかというデータの開示が必要である。

事故当初の ALPS 処理装置がうまく働いていない時も含め個別にタンク水の放射線濃度などの正確なデータが公表されれば、結論は明確だろうし、もし、データに不正や隠蔽があるなら、国家に対する信頼関係が消失するので議論する意味はない。

IAEA（国際原子力機関）は、海洋放出は科学的には許容範囲との説明であったが、彼らが公平で信頼にたる組織であることを期待する。

2023. 9. 20